

宮崎県内で発生した大規模崩壊と断層の関係

Relationship of Occurrence of Huge Landslides and Fault

高谷 精二 [1]

Seiji Takaya[1]

[1] 南九大・環境・地環

[1] Enviroment, Minamikyushu Uni.

2005年9月6日南九州を襲った台風14号は宮崎県内に多数の山地災害をもたらし、これらの崩壊には推定崩壊土量が100万立米を越える大規模な崩壊がいくつか生じた。これらはいずれも地質分類上は四万十累層に属している。大規模崩壊の原因については、主に地質構造から説明され、褶曲、流れ盤、岩盤クリーブなどが素因とされているが、四万十累層群のような付加体では地層の褶曲、断層、節理、亀裂が多く、単純な構造ではない。また崩壊地はその後の小規模崩壊によって落石やスレーキングした礫によって発生源が覆われてしまうため、原因は特定されないことが多い。

宮崎県下で起こった大規模崩壊の調査を行った結果、崩壊地内には断層とそれに付随する層厚十数cmから数十cmを有する粘土層が見られた。地中での粘土層は地下水の遮水盤になると考えられることから、崩壊の素因になると考え、その分布状態と含有粘土鉱物の実験を行った。調査したのは宮崎県内において2005年の台風14号で発生した下表の4つの崩壊地と、1993年に起こった大藪崩壊地で、地質はいずれも四万十累層に属する。